

愛海詩

えみ

印傳屋 (甲府市)

●十三代

上原勇七

ゆうしち

美と技、伝統を伝える展示会

12月20日～1月13日

特別号 No.34
 愛海詩の会
 会報
 平成24年12月15日発行
 編集発行人/ギャラリー愛海詩
 佐藤 睦子
 〒064-0821
 札幌市中央区北1条西28丁目2番17号
 TEL・FAX/(011)613-1112
 WEBSITE
 http://www.emishi-s.com
 E-mail:kougei@emishi-s.com

灯
 街の灯が純白の雪に輝き、美しいと思う時があれば、暴風雪の雪が心身共に冷たく感じる日もあります。この雪が北海道の生活にリスクを与えているとつい、思ってしまう。しかしそれでも、四季を通して変わらず、遅く前に進むとする道民を、私は心からすばらしいと思います。その人の胸には確かに一陣を照らす灯が見えるのです。そのリスクこそチャンスにしたり、明るくやりすごしたり、男女共に雄たけちいフロンティア精神が先人から受け継ぐ灯でありましょうか。そこに、細やかな文化を大切に作る灯がともれば、それはある種、背骨にもなり、確かなゆるぎのないものになります。二つの灯は相反するようですが、この、日と月の灯を持って互いに照らし合えば、こんなにすばらしいことはありません。人によりその灯は小さかったり、大きかったり、色も様々ですが、皆さん、各々灯はもっておられます。その灯を消さず、相対する人を照らし、照らされ、ご自身を知り、大切にすることが大切です。

私の灯はとも小さく、職人、作家と、みなさんとの架け橋役です。その灯がみなさんの灯と連なることにより、仕事、精神に対する力、事を成す時のエネルギーとなるのです。その灯の連なりを心に止め、感謝し、私自身もどなたかの小さな灯になればと思います。

残り少ない暦の日重ねに、平成二十四年の月日を省み、そして平成二十五年を思いまします。出会いと別れ、喜びと悲しみ、各々の中に私はまた今、新たな一隅を照らす灯をともそうとしています。消さぬよう、消されぬよう、大切に、丁寧に一日一日過ぎて、活き切る日々を重ねて行きたいと思ひます。

そして、平成二十五年も職人、作家、みなさまがよき灯をもち、よき灯と出合う年でありましますよう祈念致します。

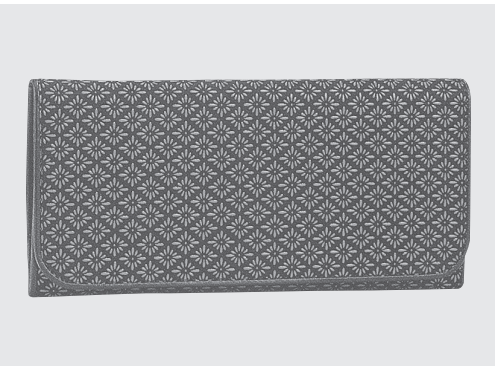


柄付けをする職人

- 「いんでん」は全て職人による手づくりです。左記にその工程をさらっと記しますが、どの工程をとっても高度な熟練と研ぎすまされた勘を要します。受け継がれる美と技と心です。
- 一、染色** …… 白い鹿革を各色に芯染めします。鹿革は一頭ごとに性質が異なることに気を止めなければなりません。
 - 二、裁断** …… 一枚革を型紙に合わせて荒断ちします。鹿革特有の角ズレの大きい部分を避け、良いところだけを選んで裁断します。
 - 三、柄付け(漆付け・更紗)** …… 鹿革の上に型紙を重ね、上からヘラで漆を刷り込むようにし、型紙をはがすと、鹿革に漆の文様が浮かび上がります。これを数日間、ムロで乾燥させます。
 - 四、縫製・仕上げ** …… 印伝革には表面に漆柄の凹凸があるので、熟練の技が必要です。型紙に合わせて正確に裁断した後、一つ、一つ丹念に縫製します。
 - 五、検品** …… 数多くの厳しいチェックを通過したものにだけ「命マーク」のシールが貼られます。これは老舗印傳屋の誇りと自信の証です。

印傳とは
 「印伝」は17世紀頃、南蛮貿易により、オランダ東インド会社により輸入され、名称は印度伝来を省略したという説があり、また、ポルトガル語indianやオランダ語indiënが変化したという説もあります。後に和様化した漆装飾の鹿革を印傳と称するようになり、江戸時代以降、広く一般に知られるようになりました。甲州印傳は上原勇七が創案したといわれ、上原家を継ぐ家長は代々「勇七」を名のり、現在は十三代目が継いでいます。

印傳は鹿のなめし革を染色し、型紙をのせ、上から漆で模様付けします。強く、柔らかく、軽い鹿革と、時が経るごとに色が冴える漆との調和により、使い込むほどに肌ざわりのよい風合いが出てきます。



束入 (9.5cm×19.5cm)
 カードポケット6、札入ポケット1、ポケット2。内側の小銭入はファスナー式、脇はマチ付です。とても使い易く、丈夫です。鹿の革、漆が手に優しく、時を経るごとに上手に使う人に添ってこなれて行きます。色々な地色、模様を取り揃えております。



ルミドール手提げ (19.5×26×12.5cm)
 黒染めの鹿革に黒漆と更紗でバラを表現しています。光と影によりバラが幾通りにも優美に輝きます。知的でエレガントな女性にこそ華やかに、気品たただようバラの洗練されたおしゃれを楽しんでいただきたい。



HAYATOブリーフケース (30×39×9cm)
 A4サイズの書類が入り、鍵もかけられます。地色は黒と茶の2種。柄は千鳥格子に似た連続模様で、シンプルな品格を表現しています。仕事ができる人が持つに相応しい、アクティブな機能美と優しい風合いをもちます。



ベネッセージュ手提げ (21.5×30.5×13.5cm)
 小旅行にもぴったりの少し大ぶりサイズ。華やかに、知的にゆれる「ふさ」がモチーフ。卓越した技を活かし、赤と黒の漆で品位、知性、権威の象徴とされてきたふさのイメージを豊かに、エレガンスに表現しています。

ご挨拶
 ～作品展によせて～
 印傳屋 十三代 上原 勇七

「いんでん」とは、應帝(ハインデン)の略とか、東インド会社が日本に鹿皮を輸出(一六一六年)した事などの説により、印度伝来の二文字を取り「インデン」になったと言われています。四〇〇余年の伝統を誇る鹿革工芸品です。鹿革に模様を付ける「いんでん」などの革工芸は正倉院宝物に武具・鞍や楽器・琵琶の装飾に見られ、奈良時代に作られた文庫革(東大寺国宝)などがあります。また、戦国武将たちの鎧や兜などをきらびやかに飾りました。山梨県甲州市の菅田天神社「盾無の鎧・国宝」もその一つです。これは武田家使用で鹿革に小桜模様になっています。

江戸時代になると、遠祖上原勇七が鹿革に漆付けする独自の技法を創案し甲州印伝が始まったとされています。当時はこの技法で作られた巾着、蓑入、早道などが珍重されました。巾着は江戸時代の東海道中膝栗毛(十返舎一九著、一八〇二年、印傳博物館蔵)に「こしにさげたる、いんでんのきんちゃくを…」の記述があります。以後、この印伝技法は家伝の秘法として、代々家長「勇七」のみに口伝されてきました。家長は代々「勇七」を襲名しています。

印伝には燻、更紗、漆技法があります。漆技法は鹿革を黒・紺・茶・ワイン・エンジ色(色)に染色し、荒裁断した後、伊勢型紙(三重県鈴鹿市白子町の伝統的工芸品)をのせ、上からヘラで黒漆・赤漆・白漆で模様を付けていきます。工房は温度、湿度が微妙なバランスで保たれております。漆職人は鹿革の特性も知り得た長い経験が要求されます。このため漆付けは八年で一人前と言われています。模様は、とんぼ・小桜・菖蒲等の鎧・兜の装飾に使われた物、晴海波・亀甲・麻ノ葉・唐草などの吉祥まで多彩です。この伝統文化を、後世に、世界に伝えていきたいと思っております。

ギャラリー愛海詩に縁ある、札幌の方々にも「インデン」のすばらしさを知っていただきたく、ご覧下されば幸いです。

☆お知らせ
 ギャラリー愛海詩のオープン時間は午前11時30分から午後6時でございます。月曜日が定休日です。職人、作家がつくった作品をご自身の生活の潤い、プレゼントなどにお使い下されば幸いです。

「私共は遠くて小さなギャラリーとはあまり取り引きはしないのです…」と断られそうになったのはもう十一年以上のことです。

すぐに私は東京に飛び、青山店に向かい、タクシーに待つていただき、当時の部長、関 安雄氏に直に会ってお話しさせていただきました。二階の部屋に通され、愛海詩の会報を手熱く語るのを関氏は真剣に聞いて下さいました。ありがたいことでした。

お話しをされていると関氏は印傳屋の仕事を誇りに思い、私は上原勇七の印傳に魅了されているところがあり、それから十数年のご縁が続く、この度、初めての展示会ができる運びとなりました。うれしいことです。各種バック、財布、ポーチ、メガネケースなど約四十点を展示します。私は使っている袋物、手帳など、ほとんど印傳屋の作品ばかりです。私自身が印傳屋のファンなのです。肌ざわりがよく、丈夫で、使えば使うほど、その人に添って役に立ってくれるという風です。

工程ごとに六十人ほどの職人がおられ、その伝統は守られています。聞くところによると、上原家ではこのすばらしい技を持った職人をとても大切にしているのです。それがまた、心打たれます。今回の展示会は関氏からご縁を受けて、荻原氏に心を砕いていただきました。印傳屋の皆さんは多くの職人の手による工程を経てできあがった作品に自信をもち、その伝統を誇りに思っているのです。

江戸時代より代々続く上原家の印傳を皆様の生活の中のスポット、スポットに愛用していただけたらともうれしく思います。